

QOL

Quality
Of
Life

QOL
サポーター
新潟

45

2017年12月10日発行
新潟医療福祉大学広報委員会編集



本学では、豊かな感性と幅広い視野を身につけられるよう積極的に国際交流を推進しています。2016年度は107名の学生が海外研修に参加し、国際感覚を養いました。

- Index
- 特集「国際化への歩み」
 - 「連携総合ゼミ」開催報告
 - 学外実習体験記
 - 「第17回新潟医療福祉学会学術集会」開催報告
 - 活躍する卒業生の職場レポート
 - CAMPUS NEWS
 - NUHW SPORTS NEWS
 - 伍桃祭を終えて
 - 高校生のみなさんへ



国際化への歩み

本学では、国際交流活動を研究・教育の両面で充実させ、在学生がこれからの保健・医療・福祉・スポーツを創造し、豊かな感性と幅広い視野を身につけられるよう、開学以来、積極的に国際交流を推進してきました。2016年には、学内に「国際交流センター」を設置し、グローバル人材の育成に向けて、積極的に活動しています。

今回は、本学における国際人育成に向けた取り組みや今後の展望について、渡辺敏彦副学長にお話を伺いました。



副学長(国際交流・強化スポーツ担当) 渡辺 敏彦

【専門】国際交流、職業教育 【所属等】学校法人新潟総合学園副理事長、新潟県専修学校各種学校協会会長、新潟県私立学校審議会委員、新潟県私学振興会副理事長、全国専修学校各種学校総連合会理事、全国経理教育協会副理事長、職業教育・キャリア教育財団理事、新潟日米協会会長 等

| 本学における国際人育成への取り組み

本学の設立の基本理念は、1.「優れたQOLサポーターの育成」2.「地域社会のニーズに応える」3.「国際交流と国際貢献」の3つです。1と2・3は全く別項目のようですが、実は大変深く関わっています。即ち、優れたQOLサポーターは、まさに“地域社会”の中で、保健・医療・福祉・スポーツ分野で活躍する訳ですので、2の地域社会とそのニーズを知る必要があります。3の「国際交流と国際貢献」ですが、QOLサポーターの活躍する専門分野は、もちろん日本だけで独立している訳ではありません。日本が世界の様々な国々と交流をして影響を受け、いわゆる「グローバル社会の中の日本」という状況に置かれている訳ですが、専門分野もまさに同じ状況にあると言えます。そして、ネットコミュニケーションが日々進化している現在、国際交流の重要性も日々増加しています。

そこで、本学では国際的な人材育成をすべく、昨年より「国際交流センター」を設置し、「国際交流専門委員会」と「留学生専門委員会」を立ち上げ、大きく4項目に分けて活動を活性化しています。

1つ目は、学術交流提携の促進です。現在9カ国・12大学・2医療機関と国際交流を実施していますが、学術交流のほか、教員・学生の「人の交流」の面でも深め、更には共同研究も検討しています。また、今後は学科の要望による新規提携校も増加していく予定です。2つ目は、学生の海外研修です。全ての学科で夏と冬に、希望者を対象に海外研修プログラムを実施するほか、国内でも、「イングリッシュキャンプ」という形で、年2回英語のスキルアップの機会が提供されています。3つ目は、留学生の受け入れです。大学院を中心に、海外提携校やその他のアジア諸国から留学生の受け入れを推進中です。4つ目ですが、JICAとの継続的な国際交流・国際貢献事業の実施です。これまでも数々の事業を実施しましたが、これからも積極的に取り組んでいきたいと考えています。

| 国際交流センターの主なミッション

2016年度に開設された「国際交流センター」では、様々な活動を通して、国際人の育成やグローバルキャンパスの実現を目指しています。

| | | | |
|--------------------------------|--|--------------------------------|--|
| <p>海外大学との学術交流協定締結推進</p> | <ul style="list-style-type: none"> ○9カ国12大学2機関との連携 ○協定校の拡充 | <p>海外語学研修の推進</p> | <ul style="list-style-type: none"> ○海外渡航事前オリエンテーションの開催 ○研修費助成金制度の運用 ○海外研修報告会の実施 |
| <p>留学生の受入れ</p> | <ul style="list-style-type: none"> ○在留資格の管理 ○奨学金応募サポート ○英語版パンフレット・ホームページの作成 ○国際交流センターFacebookの運用 ○日本留学フェアへの出展 | <p>国際協力機構(JICA)との連携</p> | <ul style="list-style-type: none"> ○国際協力講座・ボランティアセミナー ○JICA草の根技術協力事業【申請中】 |

Pick up

留学生の 受入れ

現在、新潟医療福祉大学には学部生1名、大学院生8名の留学生(中国3名、ベトナム3名、台湾2名、トゴ1名)が在籍しています。留学生支援体制を本格的に構築するため2016年度に国際交流センターが開設され、専門スタッフが常駐しサポートを行っています。また、日本人学生と交流するイベントも積極的に企画し学生の国際理解の推進に努めています。



修士課程 保健学専攻 理学療法学分野
Pham Van Manhさん
(ファン ヴァン マイン)

Interview

Q 本学へ入学しようと思った理由について教えてください。

A ベトナムのハイズオン医療技術大学で教員をしていた頃、日本のJICA(国際協力機構)が主催する「脳卒中片麻痺患者へのリハビリテーション」という研修プログラムに参加する機会があり、日本における理学療法の専門知識はもちろん、日本人の考え方や働く姿勢に対しても感銘を受けました。そして、勤務先の大学から協力を得られることになり、新潟医療福祉大学大学院へ進学することができました。

Q 現在どんなことを学んでいますか？

A 大西秀明教授の研究室で、脳卒中片麻痺患者の治療法の一つである電気刺激治療について研究しています。電気刺激治療は運動麻痺のパフォーマンス改善に役立つと考えられています。本学には最先端の設備が備わっていますし、研究の環境も整っているのもとてもありがたいです。

Q 今後の夢について教えてください。

A 大学院修了後はベトナムのハイズオン医療技術大学の教員に戻り、日本で得た知識をベトナムの学生たちに伝えていきたいです。また、教員の仕事を続けながら、なかなか治療を受けられない地域の患者さんを安い治療費で診てあげられるクリニックを開業したいという夢を持っています。

Pick up

海外研修

本学では、すべての学科で海外研修プログラムを実施し、国際交流を推進しています。海外研修を希望する学生には、事前オリエンテーションの開催や研修助成金制度の運用による費用面でのサポートなどを行っています。2016年度は107名の学生が海外研修に参加し、国際交流を通じて幅広い視野を身につけています。



医療情報管理学科 2年
伊藤 菜々子さん

Interview

Q 海外研修に参加しようと思ったきっかけは何ですか？

A 両親に「大学生のうち在海外に行って英語を今よりも話せるようになってほしい」と言われたのがきっかけでした。海外に行ったことがなかったので不安もありましたが、英語を話すことは好きだったので、参加することにしました。



Q 海外研修ではどのようなことを体験しましたか？

A オーストラリアの大学で授業を受けて日本の大学との違いを体感しました。授業は全てが英語で進み、分からないことを質問するときも英語で聞かなければいけなかったのが苦労しましたが、先生が丁寧に教えてくださいました。また、私がお世話になったホームステイ先には、5歳と8歳の女の子がいました。5歳の女の子の誕生日が研修期間内にあったこともあり、2人にぬいぐるみをプレゼントした時に、とても喜んでくれたことが印象に残っています。

Q 海外研修に参加して良かったことは何ですか？

A 研修が終わり帰る時に「もっと英会話のレベルを上げたい」と素直に思えたのは、この研修に参加したからこそだと思います。本学では英語の授業がたくさんあり、自分が学びたい授業を選ぶことができます。海外研修から帰ってきてからも英語を継続して学べる環境が整っていたことは、英語学習のモチベーションアップにつながりました。将来は、本学で培った英語力を活かせる仕事に就きたいと考えています。

Pick up

コーヒーハウス

9月6日に行われたフィリピン・台湾・中国・ベトナムの留学生との交流会の様子



「コーヒーハウス」は、学生の複言語能力を育てるための、主に英語を使用した異文化交流イベントです。母語に加えて他の言語も使えると違う世界が見えてきます。世界各地から本学に学びに来る留学生・研修生が徐々に増えてきており、その方たちとごく普通に語り、且つ、互いに異文化を感じながら学び合うためには日本語だけでなく、相手の言語や保健・医療・福祉・スポーツ分野の言わば「共通語」でもある英語などを、時と場合によって使い分ける能力も必要です。コーヒーハウスは、本学がそのようなキャンパスになることを理想としてスタートしました。月に一度、学生が英語で海外研修報告を行ったり、留学生や研修生を招いたイベントを企画したりしています。

「連携総合ゼミ」開催報告

「連携総合ゼミ」とは、本学の特徴的な取り組みの一つである「連携教育」の一環として、4年次前期に開講されるゼミで、これまで学内外で修得した専門知識・技術を総動員し、「チーム医療」を実践的に学んでいきます。

ゼミでは、具体的な症例をもとに、関連する学科が混成チームを形成。グループワークを通じて対象者のQOL向上に向けた支援策を意見交換し、検討結果を発表します。

本年度の「連携総合ゼミ」では、新潟薬科大学、日本歯科大学新潟短期大学、新潟リハビリテーション大学、フィリピンのアンヘレス大学、サント・トマス大学、台湾の国立陽明大学、中山大学の学生もチームの一員として加わり、国際的な視野が広がるなど、さらに「チーム医療」の学びの幅が広がりました。

連携総合ゼミの
流れ

①自己学習を行い自身が
担当する専門職を理解

②自己学習の成果を
グループ内で発表
し他の専門職を理解

③各専門職の立場から
意見を出し合い支援
策を共有

④協働して最善となる
具体的な支援プラン
を作成

⑤パワーポイントを用いて
研究成果をグループ発表

Report.1

開発途上国における障がいのある人たちのための 地域に根ざしたリハビリテーション

理学療法学科 准教授 古西 勇

▶ 国際的な学びを通して

私たちのゼミは、本学の国際交流協定校の一つであるフィリピン共和国のアンヘレス大学との協同によるものです。アンヘレス大学が実習を兼ねて地域貢献を行っている「地域に根ざしたリハビリテーション(CBR)」の対象者である実在の患者さんをモデルに、2011年から7年間続けて、様々な困難にある患者さんの支援策を検討してきました。今回は、フィリピンから2名、台湾から5名、本学から4名合わせて11名の学生で、脳卒中で倒れた後、在宅で療養している患者さんへの支援策を考えました。1日目はCBRの実習を経験したフィリピンの学生が英語で説明し、それぞれの専門職の立場から考えました。普段使っていない専門用語が英語で飛び交うので、それを

把握するのに苦労することもありましたが、皆で一つずつ理解を深めていきました。2日目から4日目にかけては、役割を分担しながら、支援策の提案をまとめ上げました。国により言語も価値観も違う中、考えをまとめるのは簡単なことではありませんが、解決に努力し、最後までやり遂げました。5日目は、いよいよ発表会でしたが、私たちのゼミは、参加した学生全員が英語で発表しました。スピーキングの練習にも念を入れ、お互いを高め合おうと練習を重ねていた場面では、傍から見て「自律的な調和」という雰囲気を感じました。学生たちは、一緒に食事に行ったり、メッセージのやり取りをしたりと、ゼミ以外の時間でも交流を深め、楽しく充実した一週間で満喫していました。連携総合ゼミを通して、国境を越えた学生たちの相互理解の深まりを実感できた機会となりました。



参加学生からの感想・コメント



連携総合ゼミを通して、国も文化も言語も異なる人同士が、目標達成に向けて一つになれるということを学びました。考えたことや感じたことを伝える手段である言語を活用し多国籍の方と支援策を考えることができたことを誇りに思います。

(アンヘレス大学 作業療法学科 Abigail Y. David)



知識や経験の共有を通して私は多くの考え方を学びました。連携総合ゼミの一週間は大変有意義な時間であり、「協力すること」「責任を持つこと」「自制心を持つこと」「率先して行うこと」は目標の達成につながるということを学びました。

(アンヘレス大学 理学療法学科 Aljhude Princess C. Bernales)



当初、英語が苦手だった私は、海外の学生と上手くコミュニケーションがとれるか不安でした。しかし、言葉の壁があっても優しく接してくれ、各国の文化や挨拶を私に教えてくれました。最後に海外の学生たちと楽しくご飯を食べたことは良い思い出となりました。

(社会福祉学科 中村 榛奈)



自分の意見を英語で表現するのが難しく、伝わらないこともありましたが、それでも諦めず意見を伝えようとすると相手も理解しようとするので嬉しかったです。発表をやり終えたときは言葉にならないほどの達成感がありました。

(理学療法学科 四柳 翔太)

▶ 学生と教員がともに成長する機会

私は、新潟医療福祉大学の新潟連携教育研究センター運営委員会に所属して6年目となり、これまで連携総合ゼミの評価に関わって参りました。しかし、今回は連携総合ゼミの事例担当者に立候補いたしました。これまでの研究において、連携総合ゼミの教育効果は確認できたのですが、現場の空気を体験しておく必要性を感じたからです。そこで、自分の専門領域である心理学の分野から、多職種において取り組めるテーマはないかと検討したところ、労働者のメンタルヘルス対策、労働者のストレス・コーピングが興味深いのではないかと、提案させていただき、チームを構成することになりました。



実際に、連携総合ゼミが始まってみると、想像していた以上に、学生たちが積極的且つ能動的に課題に対して取り組んでおり、実際のゼミ活動の場に身を置くことが、連携教育の真実を知ることができるということを改めて痛感しました。また、今回の連携総合ゼミは、私自身、メンバーにも大変感謝しており、決して迎り着けないような地点まで到達することができたのではないかと思います。

私が考えるに、連携総合ゼミのみならず、連携基礎ゼミ等も含めた連携教育というものは、学生の成長だけではなく、教育を担当する指導者をも大きく成長させる機会であると思いました。今後とも引き続き、連携教育に携わり続けていきたいという思いを強くしました。



参加学生からの感想・コメント



今回の連携総合ゼミでは他の専門分野の学生たちと交流、討論していく中で、今まで自分の中にはなかった知識や考え方をメンバー同士で共有することができ、これから医療従事者として社会に出る上での貴重な経験となりました。

(医療情報管理学科 清水 裕樹)



学部生と共に対象者の支援策を検討することができ、連携教育の視点からも良い経験をすることができました。学部生時代に連携総合ゼミを受講していることで、多職種の専門性や連携に関する知識・態度を学ぶことができるため、就職後の強みになると思いました。

(大学院 看護学分野 岩野 千尋)



連携総合ゼミを通して、多職種の業務内容や役割について知ることができました。また、多方面から物事を考えることで患者さんのニーズに沿った医療を提供できると感じ、チーム医療の重要性について再確認することができました。

(臨床技術学科 田中 実穂)

平成29年度 連携総合ゼミ事例一覧

- 脳性まひ(疑い)児と育児不安を持つ母への成長・発達支援
- 女子高校生競技者の食行動異常、無月経、骨粗鬆症
- 中高年者のメタボリックシンドロームの改善
- わたしも町のような人になりたい(精神科領域)
- 幼児虐待死事例の検証(報道事例)
- 切迫早産・妊娠高血圧症候群で入院が必要になった妊婦への援助
- 脳卒中片麻痺者の自宅での生活

- 開発途上国における障害のある人たちのための地域に根ざしたリハビリテーション
- 高齢者糖尿病合併症の支援策
- 発達障害児の特別支援教育における外部専門家との協力
- 重度四肢まひ者の家庭復帰計画
- 高齢者への投薬(新潟薬科大学提供事例)
- 聴覚障害のある幼児を持つフィリピン人の母親への支援
- 労働者のメンタルヘルスやストレス等に対する対策
- 家族と一緒に暮らしていきたい
(認知症患者の在宅支援:日本歯科大学新潟短期大学提供事例)



学外実習 体験記

本学では、今年度11学科で学外実習を行いました。各専門職として高い実践力を身につけることを目標とした学外実習の成果を報告します。

患者様のニーズに合わせて

私は、東京湾岸リハビリテーション病院で評価実習をさせていただきました。私が担当した患者様は「家に帰りたい」と望んでいました。そのニーズに応えるために、機能を評価するだけでなく、自宅復帰するためにどのような動作が必要か、どのような介助が必要か、福祉サービスは利用するのかなど、幅広い視点で考えました。実習を通じて、理学療法士一人で考えることは大変難しいことであり、改めて多職種と連携することで、患者様により良い治療を行えることを実感しました。私たちが対象とするのは、病気によって何気なく生活を送っていた日々が大きく変化した患者様です。患者様の生活を完全に元に戻すことは、限りなく難しいことですが、患者様の要望に応えられるよう、幅広い視点で考えることの重要性に気づくことができました。



理学療法学科 3年
松澤 寛大

今回の実習で体験させていただいたこと、患者様、先生方から教わったことを活かし、今後も勉学に励みたいと思います。

評価実習を通して学んだこと

私は、10月2日から埼玉県にある自治医科大学附属さいたま医療センターにて3週間の評価実習をさせていただきました。実習では一人の患者様を担当し評価させていただきましたが、実際に評価していく中で知識や技術不足を痛感しました。しかし、評価する機会を多くいただけたおかげで、臨床の現場でなければできない貴重な経験ができ、自分に足りなかった知識や技術を学ぶことができました。また、患者様と信頼関係を構築することの難しさも実感しました。実習では、作業療法士の先生方の患者様に対する接し方を見学することができたため、些細な言動も患者様と信頼関係を築く上で大きな要因になることを学ぶことができました。3週間という期間でしたが、患者様を評価していく中で知識や技術、患者様との接し方などたくさんのごことを学べた実習となりました。今回の実習で見つけた課題を改善し、来年の総合臨床実習に向け、勉学に励んでいきたいです。



作業療法学科 3年
高橋 花緒梨

総合実習を終えて

埼玉県所沢市にある国立障害者リハビリテーションセンターにて2か月間、総合実習をさせていただきました。実習では臨床の見学、また患者様に対する評価・訓練などを担当させていただく中で、患者様に対する関わり方を学ぶことができました。



言語聴覚学科 4年
柄澤 菜々子

特に印象に残ったことは、患者様の障害や症状だけに目を向けるのではなく、様々な視点から訓練へつながる手掛かりを探り、そこからどのようにアプローチをしていくのかを考えることが大切であるということです。実習ではフリートークや訓練後の何気ない会話などから次のステップの訓練につながる手掛かりが見つかることが多くあり、患者様一人ひとりの生活を考えながら適切な訓練を決定・実施することを心がけました。

今回の総合実習で経験させていただいたことを活かして、今後の勉学に励んでいきたいです。

オーストラリアでの実習を終えて

私は、日本の企業・施設では経験できないことがきっとあると思い、オーストラリアのフットケアクリニックで4週間実習をさせていただきました。実習では、主に疾患を持つ人の靴の製作・修理・フットケア・歩行分析を行わせていただきました。実習の中で最も指導されたことは、「作業中の体の姿勢」です。背中が丸まった悪い姿勢で作業をしていたとき、「オーストラリアでは「援助者の健康」が最も大切とされており、治療や介助をする人がされる側になってはならない」ということが常識だと教えていただきました。普段の大学での授業では、対象者の方の生活を改善することばかり考え、自分の健康を疎かにしていることに気がつきました。



義肢装具
自立支援学科 3年
山川 亮輔

今回の実習では、風土や文化の違いはもちろんのこと、保険制度や医療に対する考え方の違いなど、様々なことを学ばせていただきました。今後も英語の勉強を継続して行い、世界で活躍できる義肢装具士を目指したいと考えています。

臨床実習から得たこと

私は、2か月間の臨床実習を北海道の病院で行いました。臨床検査分野で1か月、臨床工学分野で1か月と短期間ではありましたが充実した実習となりました。実習期間中は指導者の皆様から厳しいながらも将来につながる指導をしていただき、医療従事者として働くイメージをつけることができました。実際の医療現場にも臨床検査技師と臨床工学技士のダブルライセンスを取得し働いている方も多くいらっしゃり、ダブルライセンスの知識を実際の臨床現場で活かすことができるということを実感することができました。また、心肺停止で運ばれてきた患者様が数日後には話すことができるようになるまで回復している姿を拝見し、医療従事者としてこのような現場に携われることに誇りを持っていきたいと思いました。



臨床技術学科 4年
藤田 木綿

この臨床実習を通して学んだことを将来に活かすことで、この臨床実習の価値をより高めることができると 생각합니다。

臨床実習を終えて

今回初めての实習で、新潟大学地域医療教育センター・魚沼基幹病院にて5日間臨床実習をさせていただきました。実際に臨床現場で活躍する視能訓練士のご指導の下で、眼科診療の流れを学びました。

臨床の現場ではやはり、学内実習とは違った点がいくつかありました。特に検査説明の丁寧さです。学内実習でも検査説明を丁寧に行うよう言われていたのですが、学生同士で行っているため雑になってしまっている点があったと感じました。視能訓練士の先生方は検査法や検査中の視線の方向を、その都度患者さんと確認していました。そうすることにより、スムーズに検査が進む上に正確な検査結果が得られることがわかりました。

その他にも検査結果の見方、患者さんの見え方や疾患に合わせた対応などを教えていただきました。授業で学んだ知識の確認や臨床の場でしか分からないことなど学ぶことができ、充実した実習となりました。今回の臨床実習で学んだことを今後活かしていきたいです。



視能科学科 2年
岡部 萌

臨床栄養学実習を終えて

9月4日から新潟市西蒲区にある岩室リハビリテーション病院にて3週間の臨床実習をさせていただきました。実習では昼食時の病棟訪問や、一人の患者様を担当し栄養管理に関する評価を行うなど、大学では学ぶことのできない貴重な経験をさせていただきました。

その中で患者様の身体機能向上や希望を叶えるためには多職種との連携が大切であることを改めて感じることができました。また、昼食以外の食事の様子や気になる点などを看護師の方に伺ったり、患者様と過ごす時間が多い言語聴覚士の方に患者様の話を聞いたりしました。患者様一人ひとりにじっくり時間をかけ話し合うカンファレンス以外でも、より良いサポートを行うためには多職種との連携が必要不可欠であるということを知りました。

3週間という短い期間でしたが、今回の実習で経験させていただいたことを糧に今後の勉学に励んでいきたいと思っています。



健康栄養学科 3年
小林 彩香

特別支援学校での実習を終えて

私は、新潟市内の特別支援学校で2日間の実習をさせていただきました。障害を持った子どもたちが対象ということで、生徒との関わり方では苦労することが多々ありました。例えば、「急に黙り込んで物や人にあたりすぎる」「以前までできたことがその日になって急にできなくなってしまう」「一つのこと集中できずに別のことをやりたがる」など多様な生徒を目の当たりにして、事前学習をしたつもりでしたが、どのように接したらよいか迷うことが多々ありました。これに対して、特別支援学校の先生方はそれぞれの生徒に応じた対応をされていて、勉強になることが多かったです。

また、私の名前を1日目に覚えてくれた生徒が、2日目に「今日は伊藤先生いるの?」と気にしていたと担任の先生から伺い、とても嬉しくなりました。2日間という短い期間でしたが、普段できない貴重な経験をすることができました。今回の経験を4年生の教育実習で活かしていきたいです。



健康スポーツ学科 3年
伊藤 渉

より良い看護を目指して

私は実際に病院で実習を行い、自分の立てた計画通りに患者さんにケアをすることができなかつたと感じました。なぜかというと、初めから計画を立てて看護をしようとしても、患者様の希望や性格に合わせて、看護の方法を考えて対応していかなければならないからです。一人ひとりに合わせた個性のある看護を行うためには、患者さんを「よく観て、理解する」ということがとても重要なのだと思いました。

全く同じ状況の患者さんはいないため、教科書通りの看護を提供することが患者さんにとって良い看護ではないことを改めて実感した実習となりました。また、患者さんの全てを援助するのではなく、患者さん自身持っている強みを引き出し、必要などを支援することが看護であることも改めて感じました。病院で看護する患者さんは、あくまでも人生の一時期を病院で過ごしているということをお忘れず、一人ひとりと向き合い、より良い看護を提供していけるよう頑張りたいです。



看護学科 2年
土岐 文乃

利用者本位の支援を考えること

私は、介護老人保健施設で実習し、業務内容や利用者、家族、多職種との関わりを体験的に学びました。実際の業務では、利用者の在宅復帰を目指すリハビリをはじめ、医療ケア、看護ケア、看取りケアなどの役割が求められ、利用者の尊厳が保たれているか、安全に配慮しながら生活機能の維持・向上が図られているかが、常に問われていました。そんな現場だからこそ、利用者本人の意思を尊重し、医師、看護師、理学療法士などからなるチームケアで、利用者の自立・自律を支える真剣な姿とスタッフの「笑顔」に、医療と福祉の仕事の魅力を強く感じました。また、実習を通じて利用者の方々に出会えたことに感謝しながら、誠実に接することで、たくさんの「笑顔」をいただきました。利用者の「笑顔」が、自分の「喜び」になることも知りました。今回の実習で感じた喜びややり甲斐などの想いを大切に、利用者の方々に信頼される医療・福祉の専門職を目指したいと思っています。



社会福祉学科 3年
今井 優汰

病院実習を終えて

私は、夏休みの期間に1週間の病院実習を行い、「診療情報管理士」の業務を体験させていただきました。今回の実習で「診療情報管理士」の業務内容を具体的に理解することや、将来自分が病院で働く姿をイメージすることができました。また、「ドクターズクラーク」の業務内容や授業で学んだ制度がどのように運営されているかなどの話を聞くことができ、とても良い経験になりました。

実際の業務を体験することで、自分の知識が足りていないということにも気づくことができました。特に専門用語が多く使われている実際のカルテから、必要な情報を探るのがとても大変で難しかったです。また、今後身につけなければならない知識を確認する機会にもなりました。今回の実習で感じたことをお忘れず、診療情報管理士として病院で働けるよう勉学に励んでいきたいと思っています。



医療情報管理学科 3年
関 裕香

第17回新潟医療福祉学会学術集会 開催報告

実行委員:看護学科

新潟医療福祉学会は、新潟医療福祉大学を中心にした健康・医療・福祉・スポーツに携わる人たちの研鑽の場として立ち上げられました。毎年秋に行われる学術集会は、個々の職能者のみを対象とする集会ではなく、幅広い職能者が集う貴重な機会として、情報交換をしながら、「チーム医療」を実感できる場にもなっております。

今年度は、10月28日(土)に新潟医療福祉大学を会場として、一般演題71題(口演発表5題、ポスター発表66題)、特別講演およびシンポジウムを含め、合計75演題の発表が行われ、発表後には、会頭賞・奨励賞の表彰が行われました。

テーマ

未来へつなぐ保健・医療・福祉・スポーツ分野のシミュレーション連携教育

特別講演

講演タイトル:未来へつなぐシミュレーション教育

座長:松井 由美子(新潟医療福祉大学 看護学科 教授)

講師:永島 美香(東京医科大学 副学長補 副看護学科長)

基礎教育において、学生の看護実践能力を育成するための教授方法の一つとして近年注目されているシミュレーション教育の意味、カリキュラムへの効果的な導入の実際、将来展望について講演していただきました。

シンポジウム

未来へつなぐ保健・医療・福祉・スポーツ分野のシミュレーション連携教育

座長:永島 美香
(東京医科大学 副学長補 副看護学科長)

「理学療法学科におけるOSCE(客観的臨床能力試験)の取り組み」

講師:高橋 英明

(新潟医療福祉大学 医療技術学部 理学療法学科 助教)

シミュレーション教育の一部である模擬患者を活用したOSCEを、臨床実習I~Ⅲの段階に応じた評価設定、評価方法、実践場面を通して紹介し、効果的なシミュレーション教育について考察していただきました。

「一次救命処置(BLS)におけるシミュレーション教育」

講師:木下 悟

(国立病院機構新潟病院 小児科医長)

誰でも一次救命処置が行えることを目指して、映像教材・教科書・人形・AEDトレーナーを用いて事務職員を含む多職種スタッフを対象としたシミュレーション現場教育を紹介し、現場における連携について提案していただきました。

「コンピュータシミュレーションによる膝関節アライメント評価と人工膝関節術前計画・術後評価とその製品化」

講師:坂本 信

(新潟大学 副学長・医学部保健学科放射線技術学専攻教授)

医療系と機械工学系の研究者が共同・連携して研究した成果を基に、大学や分野を超えて共同で研究に取り組むことで未来につながる研究成果が得られることを踏まえ、積極的な大学間連携の提案をしていただきました。

特別公演



シンポジウム



企業展示



午前の部では、一般演題の口演発表およびポスター発表が行われ、活発な意見の交換がなされました。ポスター会場では同時に企業展示もあり、シミュレーター・モデル人形、各種測定機器等の展示が行われ、実際に触れながらディスカッションを行うことで研究交流が生まれるなど充実した学会となりました。

皆さまのご支援とご理解のもと、正会員94名、準会員・非会員208名、合計302名の方々にご参加をいただきました。また、出展企業5社、広告掲載企業31社、協賛企業5社にもご協力・ご支援をいただきました。皆様のご協力により、盛会のうちに今回の学術集会を終えることができました。改めて心よりお礼を申し上げます。

次回の「第18回新潟医療福祉学会学術集会」は、2018年10月に開催される予定です。来年度も多数のご参加をお待ち申し上げます。

卒業生
レポート
FileNo
01

人を助ける 義肢装具士に 憧れて



株式会社
幸和義肢研究所
義肢装具士
岩崎 圭亮さん
栃木県 宇都宮工業高校出身
義肢装具自立支援学科
2016年3月卒業

▶ 現在の仕事内容を教えてください。

私は現在、義肢装具士として働いています。義肢装具士とは、事故や病気で手や足を失ってしまった人に対し、医師の処方のもと義足や義手の製作をしたり、体の機能に障害を持った方または骨折などの怪我をした方に対して装具の製作を行ったりします。主な業務としては、様々な病院に伺い医師や理学療法士、作業療法士と連携し、一人ひとりに合った義肢や装具を作るために採寸・採型を行います。そして会社で製作した後、病院に持参し、体に適合させるための調整を行っています。これからも一生懸命努力して立派な義肢装具士となり多くの人を笑顔にしていきたいです。

▶ 本学で学んだことは、現在の仕事にどのように活かされていますか？

学生時代、身体の構造や義肢装具の基本的な知識や技術を得たことはもちろんですが、他学科の学生と共に色々な専門職の視点からのアプローチを学ぶことができました。多職種を理解し、連携をとることの大切さを4年間でしっかり学ぶ環境があったからこそ、医師や患者様への対応を円滑に行うことができています。



▶ これから義肢装具士を目指す高校生や在學生へメッセージをお願いします

義肢装具士は特殊な医療従事者ですが、物を作って人に合わせる事がとても大変なことで現場に出てより一層実感しています。しかし大変な分、作り上げたものが適合した時の達成感がとても心地よく、一番やりがいのある仕事だと思います。先生方や先輩方にも色々アドバイスをもらいながら立派な義肢装具士を目指してください。

卒業生
レポート
FileNo
02

給食が子どもたちにとって大好きな時間になるように

新潟県立上越特別支援学校
管理栄養士
石黒 花背さん
新潟県 新潟中央高校出身
健康栄養学科
2012年3月卒業



▶ 現在の仕事内容を教えてください。

私は、栄養教諭として特別支援学校に勤務しています。特別支援学校の分類は障がいの種類や症状によって異なりますが、私が勤める学校は肢体不自由を有する児童生徒が多いため、車いすを利用し、食事の介助が必要な児童生徒も在籍しています。

私の仕事は個別的な栄養管理、嚥下・咀嚼機能の把握、ミキサー食の提供、給食や舎食の運営、衛生管理、食育、アレルギー対応など多岐に渡っています。校内の職員と連携し、情報交換を密にしながら、子どもたちの安全のために日々業務に取り組んでいます。

▶ どのようなときに仕事にやりがいを感じますか？

日々の業務は大変ですが、給食時の子どもたちの一生懸命食べる姿、好きなものをおいしそうに食べる顔、苦手な食べ物に挑戦する意欲など、自分の気持ちを素直に表現してくれる姿に日々やりがいを感じています。食を通じて子どもたちを笑顔にできるこの仕事を誇りに思います。



▶ これから管理栄養士を目指す高校生や在學生へメッセージをお願いします。

学生時代は学びを通してたくさんの経験をすることができました。困ったときに相談に乗ってくれる先生や志を共にする仲間に出会うこともできました。また、卒業後は管理栄養士や栄養教諭免許等の資格を活かして、様々な場所で活躍することができます。長い目で自分の将来の姿を見据え、目標に向かって頑張ってください。応援しています！

教員採用試験 現役合格者7名輩出!



平成29年度実施「教員採用試験」において、健康栄養学科1名、健康スポーツ学科5名、看護学科1名の現役合格者を輩出しました! 本学教職課程のある全学科での現役合格者輩出、また初

めの小学校教諭の現役合格者輩出となりました。本学健康スポーツ学科では、昨年度より玉川大学と提携し「小学校教員養成特別プログラム」を開始し、初代プログラム受講生として現役小学校教諭を目指す挑戦での合格となりました。

さらに、本学教職課程の卒業生 計9名(健康スポーツ学科卒7名、看護学科卒2名)が合格し、計16名が未来を担う子どもたちの教育者として活躍することになります。

本学教職課程では、昨年度設置された教職支援センターにて模擬授業や面接対策指導を実施し、さらに各学科にて各専門の筆記試験対策講座や各種実技対策などを開講するなど、教職志望の学生に対する全面的なサポートを展開しています。今年度現役合格を果たした学生たちも、1・2年次からこれらの対策講座に参加してきた努力が実を結んだかたちとなりました。今後も、一人でも多くの学生が希望を叶えられるよう、引き続き全力でサポートしてまいります。

理学療法学科のスポーツ医科学Lab 中学野球選手のメディカルチェックを実施

10月14日(土)・15日(日)の2日間、理学療法学科のスポーツ医科学Labの中村絵美先生とLab所属の4年生が、肩・肘関節の柔軟性や筋力、下肢のバランス機能、投球のフォームのチェック、超音波診断装置を用いた肘や肩の検診を長岡市の



中学野球選手を対象に行いました。

この2日間のメディカルチェックを皮切りに、数日に分けて多くの中学野球選手の肘や肩の怪我などの調査を行います。今後も新潟の中学生から怪我で苦しむ選手が一人でも少なくなるように、活動を継続して行っていく予定です。

平成29年度文科省 私立大学 研究ブランディング事業に本学が採択

平成29年度文部科学省「私立大学研究ブランディング事業」に、本学の「リハビリテーション科学とスポーツ科学の融合による先端的研究拠点-Sports&Health for All in Niigata-」が選定されました! この事業は、学長のリーダーシップのもと、大学の特色のある研究を基軸として、全学的な独自色を大きく打ち出す取り組みを行う私立大学等に対し、経常費・設備費・施設費を一体として重点的に支援されるものです。



新潟医療福祉大学 私立ブランディング事業概略

- **事業名:** リハビリテーション科学とスポーツ科学の融合による先端的研究拠点—Sports & Health for All in Niigata—
- **申請タイプ:** タイプA『地域の経済・社会、雇用、文化の発展や特定の分野の発展・深化に寄与する研究』
- **支援期間:** 5年
- **事業概要:** リハビリテーション科学とスポーツ科学の融合による先端的研究拠点を形成し、基礎的研究および実践的研究を基盤とした“Sports & Health for All in Niigata”(地域住民からアスリートまで全ての人が安全にスポーツを楽しみ、幸せな生涯を過ごす新潟県)を創出する。これにより、本学ブランドを浸透させるとともに、将来ビジョン「保健・医療・福祉・スポーツ領域を核としたアジアに秀でる研究拠点」の基礎を構築する。

閉校する小学校の思い出作りに 本学学生がボランティア活動を実施

新潟市立太田小学校(新潟市北区)は、2018年3月に隣接学区の葛塚東小学校と統合するため145年の長い歴史に幕を降ろします。閉校にあたり、地域(太田ちいきコミュニティ協議会)と学校では「閉校記念事業実行委員会」を組織し、年間を通じて各種事業に取り組んできました。

その事業の一環として、生徒たちのリクエストで選ばれた人気テレビ番組「逃走中」をイベントとして開催し、本学社会福祉学科の1年生3人、4年生6人がボランティアで参加・協力しました。当日は、学校の先生のみならずPTAである教育振興会の保護者の方々も多く参加し、事故やケガの無いように十分に配慮されながら行われました。

太田小学校に通い、学べる期間は、あと数ヶ月。子どもたちの心の中には、夏の暑い日、学び舎で大学生と鬼ごっこをした楽しい思い出がいつまでも残ることでしょう。本学では今後もこうしたボランティア活動に積極的に参加してまいります。



陸上競技部

前山美優選手が アルビレックスランニングクラブに入団!



PROFILE

前山 美優 選手 (健康スポーツ学科 4年)
 生年月日: 1996年2月21日
 出身高校: 新潟県 新潟商業高校
 専門種目: 100m (日本ランキング第3位)
 200m (日本ランキング第5位) ※2017年10月6日現在
 自己記録: 100m 11"51 (新潟県記録・北信越学生記録)
 200m 23"80 (新潟県記録・北信越学生記録)

前山 美優選手からのコメント

「生まれ育った地元新潟で強くなりたい」という私の決意、そして「2020年東京オリンピック出場への挑戦」を応援し支えてくださる多くの方々のおかげで、卒業後も新潟で競技を続けさせていただくことになりました。東京オリンピックへの道のりは決して平坦ではないと思いますが、大学4年間で培った経験を活かし、一つずつ乗り越えて前に進んでいきたいと考えています。今後とも精進してまいりますので、ご声援のほど宜しくお願いいたします。

男子・女子サッカー部

男子・女子サッカー部アベック 男で全日本インカレ出場!

男子サッカー部が「第45回北信越大学サッカーリーグ」で優勝、女子サッカー部が「第26回全日本大学女子サッカー選手権北信越大会」で優勝を果たし、男女共に北信越代表としてインカレに出場しました。女子は6年連続6回目、男子は5年ぶり4度目のインカレ出場となります。更なる高見を目指し精進してまいりますので、今後とも、男子サッカー部および女子サッカー部へのご声援のほどよろしくお願いいたします。



女子バレーボール部

第65回秋季北信越大会 バレーボール選手権大会 優勝!



富山県総合センターで行われた「第65回秋季北信越大学バレーボール選手権大会」において、本学女子バレーボール部が優勝し、全日本インカレへの出場を果たしました。本学バレーボール部での北信越大学リーグ春季・秋季を通しての優勝は初となります。今回の試合では、終始リードする形で最後まで攻める気持ちを持ち戦うことができました。一人ひとりが躍動し、チームがやるべきバレーボールを体現することができた試合だったと思います。今後、さらにチーム力が向上するよう取り組んでいきたいです。各方面の皆様、いつもご支援ご協力ありがとうございます。

バレーボール部での北信越大学リーグ春季・秋季を通しての優勝は初となります。今回の試合では、終始リードする形で最後まで攻める気持ちを持ち戦うことができました。一人ひとりが躍動し、チームがやるべきバレーボールを体現することができた試合だったと思います。今後、さらにチーム力が向上するよう取り組んでいきたいです。各方面の皆様、いつもご支援ご協力ありがとうございます。

キャプテン/山口 彩(健康スポーツ学科4年)からのコメント

今年の北信越大学リーグで春季、秋季と優勝できたことをうれしく思います。だんだんと自分たちのバレーの形が確立され、自信を持ってプレーできるようになったと今回の大会を通して感じました。試合では苦しい場面もありましたが、チーム全員が『勝つ』という強い気持ちで戦ったため大きく崩れることなく最後まで攻め切れたと思います。しかし、まだまだ課題はたくさんあります。ここで満足せず、さらに強いチームになれるよう努力していきたいです。

伍桃祭を終えて

第17回伍桃祭(大学祭)報告

今年の伍桃祭は、「百華繚乱」というテーマで開催しました。「百華繚乱」は、百花繚乱の造語であり、四字熟語本来の意味と「華」の持つ意味を踏まえて、「学生の個性が一つひとつ輝くような伍桃祭にしたい」という強い願いを込めました。今回の伍桃祭は、実行委員はもちろん、ステージでパフォーマンスを披露してくれた部活動・サークルの皆さんや出店を企画してくれた学生団体の皆さん、事務局の方々など、本当にたくさんの方々のご協力のもとで開催できました。

初日は、4組もの「よしもと」の芸人の皆さんを迎えてライブを開催し、多くの方にご来場いただきました。ライブが始まるやいなや、笑いが沸き上がり、笑顔になった来場者の皆さんを見て、これまでにない充実感を得ることができました。また、今年は初日だけでなく2日目に新潟県出身の

アイドルグループ「RYUtiist」の皆さんのLIVEを開催し、笑いが沸き上がった初日とは雰囲気が変わり、会場に歌声が響き渡りました。

今年も天候の心配はありましたが、2日間ともすべてのイベントを無事に行うことができました。来場者の皆さんが笑顔で帰る姿を見て、ここまでやってきて本当に良かったと感じました。これはきっと私だけでなく、運営委員全員が感じたことではないかと思います。

最後になりますが、無事に伍桃祭を終えることができたのも、地域の方々やご協賛いただいた企業様をはじめ、教職員の方々や参加してくれた学生の皆さんなど、多くの方々にご協力いただいたおかげです。そして、企画・運営してくれた学友会・伍桃祭実行委員に感謝します。ありがとうございました。

第17回伍桃祭実行委員長兼学友会副会長 板垣 匠



高校生のみなさんへ

春のオープンキャンパス 3月17日(土)

バスツアー
運行予定!

新3・2年生に向けて、「大学・入試説明」はもちろん、「施設見学」や「個別相談」「体験プログラム」など様々なプログラムをご用意しています。また、「将来何になったら良いかわからない」「夢が見つかった!」や、「進学先が見つからないが」「志望校が決まった!」など、進路意識が変わる瞬間に出会えるチャンスです。また、新潟県内外の各都市より無料の日帰りバスツアーも計画しています。どうぞお気軽にご参加ください。



一般入試・センター試験利用入試ご案内

■一般入試日程

| 日程 | 出願期間 | 試験日 |
|----|----------------------------|------------------|
| 前期 | 12/25(月)~1/17(水) [消印有効] | 2/5(月) 2/6(火) |
| 後期 | 2/7(水)~2/25(日) [消印有効] | 3/8(木) |

■センター試験利用入試日程

| 日程 | 出願期間 | 試験日 |
|-----|----------------------------|-------------------|
| 前期 | 12/25(月)~1/22(月) [消印有効] | 本学独自の個別学力検査等は課さない |
| 後期* | 2/7(水)~2/25(日) [消印有効] | |

※作業療法学科・健康栄養学科を除く11学科にて実施

■一般入試のポイント

- 前期日程は2日間の試験日を設定。両日受験することで合格のチャンスが拡大!
⇒「第2志願制度」の活用で最大4学科まで出願可能!
⇒ 両日共に同一学科に出願した場合、高得点の試験日の点数を採用!
- 前期日程では、特待生制度で最大4年間の授業料が全額免除。
- 「第2志願制度」の活用により、一度の出願で第2希望学科まで志願可能。
※「理学療法学科」「臨床技術学科」「診療放射線学科」「看護学科」を第2志願学科とすることはできません
- 前期日程では全国8都市、後期日程では全国5都市に試験会場を設置。
(前期日程:新潟・東京・郡山・高崎・長野・富山・鶴岡・仙台)
(後期日程:新潟・東京・郡山・長野・鶴岡)

■センター試験利用入試のポイント

- センター試験を受験し、自己採点を終えた後でも出願可能!
- 選択科目は高得点科目を自動的に採用!
※地理歴史・公民および理科②は、第1解答科目の得点を採用します
- 「複数学科への出願」や「一般入試との併願」で合格率UP!

インターネット出願
インターネット出願では、 **1出願につき3,000円割引!**



新潟医療福祉大学

〒950-3198 新潟市北区島見町1398番地
TEL 025-257-4455(代) FAX 025-257-4456
URL <http://www.nuhw.ac.jp/>
スマートフォンサイト <http://www.nuhw.ac.jp/sp/>
【入試事務室】TEL 025-257-4459
E-mail nyuusi@nuhw.ac.jp

誌名「QOLサポーター新潟」の由来

世界一の長寿国となった我が国では、「いのちの長さ」を伸ばすことと同様に、「生活の質、Quality of Life, QOL」を豊かにすることが、益々重要になっていきます。新潟医療福祉大学では障害者、高齢者などのQOLを高くすることを支援する(サポート)人材を育成します。このような人材を「QOLサポーター」と名づけました。そして皆様へ本学の内容、活動をお知らせする広報誌を「QOLサポーター新潟」としました。

